

自閉症の方の居場所づくり

明光ワークス 生活介護
高井 佑樹

1 概要

1人の自閉症の方が、事業所内に入室できずに終日外で過ごしていました。終日外にいる利用者に対してなぜ外にいるのか？本人が望んで外にいるのか？という疑問からご本人のこトばや行動を素直に受け止め、過ごしやすい環境を提供する事はできないかと考え、事業所への入室、プログラムの確立、小集団での活動を目標に取組みを開始しました。

2 取組み前の状況

以前、他事業所に通所されていましたが、平成24年4月から当事業所に通所されています。通所開始から約1年間事業所内に入る事が出来ず、毎日のようにパニックになる日が続いていました。

1年が経ち、個別室を準備する事で入室する事ができるようになりました。以前通っていた事業所で行っていた作業（ペットボトルのリサイクル作業～ラベルを剥がし、蓋と分別する。）を提供する事でプログラムにも参加できるようになりました。しかし、安定した作業量が供給できておらず、作業があるかどうかの見通しが立たない状態でした。

その後、周囲に呼びかけて、作業量の確保・供給が安定したため、無作為に作業量を増やしたところ、大きなパニックを起こし、作業ができなくなった経緯があります。

26年3月に改修工事が入り、環境が変化したためか、26年度に再び事業所内に入る事ができず外で過ごす事がほとんどとなってしまいました。

このことから、見通しの立たない毎日、自身の居場所が分からないという理由で入室できないのではないかと見立てをし、新たな取組みを始めました。

また、人への関心が強い事から小集団での活動なら可能なのではないかと考え、27年4月より、1年目は事業所への入室を目標とし、2年目にプログラムの確立を目指し、3年目には小集団での活動を目標とした取組みを行いました。

ご本人は、人への関心は強いものの対人関係は希薄であり、集団行動で長時間過ごす事は困難です。また、ご本人から他者への伝え方、関わり方などの表現方法に課題がありスムーズな意思表示が難しい状態です。また、過剰な声かけは本人にとって不快なものであり、拒否的な態度を示す傾向が強いです。

また、ご本人が不快と感じる環境（大きな声や、甲高い声、持続するしゃべり声、賑やかな場所）は苦手であり、過去の経緯から、苦手な環境が続いた際や、不安要素（スケジュールの変更・見通しが立たない）があると、様々な事柄に対して過敏に反応しパニックになる事があります。

3 年度別本人の様子・取組み・結果・考察

(1) 平成 27 年 4 月～平成 27 年 8 月

取組み前の様子

生活介護室の周りにおり、窓から中の様子を覗く等をしていました。ただ、昼食、排泄時は、事業所内に入ることができていました。

パニックになる回数も多く、そのたびに、本を破り、施設内に撒く行為をしており、ご本人が帰宅した後に職員が事業所内を掃除する日が続いていました。

取組み

部屋の場所は違いますが、過去の個別室と同じ配置で環境を整えました。また、文字や絵の理解があるので、視覚的情報で本人に説明を行いました。午前は DVD を見るプログラムを提供しました。

また、ごみ箱を用意し、本を破った際は、ごみ箱に捨てるように説明を行いました。

結果

入室するのに 1 日かかりましたが、入室する事ができました。

日ごとに部屋のマットで過ごす時間が長くなり、1 日を通して事業所内で過ごす事が出来るようになり、パニックになる回数も徐々に減ってきました。

ごみ箱に関しては、導入初日に壊してしまい、その際に「(ゴミ箱) いりません。捨てません。」と大きな声を出す事がありました。しかし、破った本を外に撒く事はなくなり、個別室の中に撒くようになりました。

考察

1 日を通して部屋で過ごす事は出来ていますが、パニックになって本を破ったりする行為は続いていました。パニックになる時は、午前の DVD が終わってから昼食までの時間帯に多いことが分かりました。

その後、聞き取りを行うと、「朝は DVD、昼からは食堂。本読みます。」と自身の要望を言ってくれるようになりました。

破った本に関しては、「(ゴミ箱) いりません。捨てません。」という言葉から、本人にとってはゴミでは無いのではないかという意見が出たため、片づける箱を用意してみることにしました。

(2) 平成 27 年 9 月～平成 28 年 3 月

取組み前の様子

個別室には居る事が出来ますが、プログラムの合間にパニックになる事がありました。

このようなときは、部屋の中は破った本が散乱し自身の見たいページが見つからず、大声を出し、落ち着かない様子でした。

午後からは食堂に移動し、本を読みながら他の利用者の様子をながめる事が日課になっていました。

取組み

通所後、DVD を見る前に、個別課題を 3 個用意し取り組んでもらいました。

個別課題→DVD→休憩→昼食→食堂で読書 という 1 日の流れを、図を用いて説明をおこないました。

破った本に関しては、片付ける箱を用意し、改めて説明を行いました。

結果

個別課題をプログラムの中に入れる事で、DVD と昼食の間でのパニックは、ほぼなくなりました。午後からも食堂に移動し、本を読みながら他の利用者が行っているプログラムを笑顔で見ることができていました。

片付け箱を用意する事で、本の散乱がなくなった訳では無いですがプログラムの切り替え時等は、箱に戻す姿が見られました。また、声かけでも片付けを行ってくれるようになりました。

考察・次期取組みについて

個別課題に取り組む、1 日の流れが理解出来始める中で、職員の介入は少なくなってきました。しかし、本人の特性として他者の動向が気になるという点から、廊下に出て職員の動きや、利用者の動きを気にする素振りがみられました。15 分に 1 回の所在確認の声掛けと朝のホワイトボードでの出勤職員の確認、プログラムの確認を行えば、より安心して他者を気にせず過ごせるのではないかという意見があり、取り組みをはじめました。

また、職員との関係性も出来始めてきたので、少人数での外出であれば可能なのではないかと考え、本人へ打診を行いました。

(3) 平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月

取組み前の様子

ホワイトボードの確認→朝の課題→DVD 鑑賞→読書という事業所で過ごすリズムが出来て、1 日を通して落ち着いて過ごす事が出来るようになってきました。

本人の納得いかない事でもパニックにならず「しません。いやです。」等、言語での意思表示を行う事ができてきました。

取組み

課題の数を 3 個から 5 個に変更しました。変更時期や数の確認を本人と行い、納得した上で取り組んでもらいました。DVD も選択できるよう複数枚用意し提供を行いました。

年 4 回の外出行事に参加してもらいました。事前説明（場所・日時・人）を行い、見通しが持てるように支援を行いました。

結果

事前説明を行う事で、スムーズに課題の数を増やす事ができました。「今日から 5 つです。」と確認しながら行う様子が見られました。

外出行事には落ち着いて参加する事ができました。気になる事柄は何度も確認している様子から落ち着いてはいるが緊張している様子でした。

DVD は複数枚用意しましたが特定の DVD 以外を見る事はありませんでした。

考察・次期取組みについて

DVD を見る事自体が少なくなっており、他の利用者や職員の動きを見ている時間が長くなってきました。

様々な事柄に対して、見通しを持つ事でスムーズに動けるようになってきています。パニックに関しても、他の利用者がパニックになった際に、刺激を受けたためか興奮してしまう事が5回ありましたが基本的には落ち着いて過ごしていました。

普段は、お椀にご飯と好きなおかずを入れ、どんぶりにして食べていましたが、11月に実施した社会見学の昼食では、ご飯とおかずを別々に食べている姿が見られ、普段の食事でもお弁当箱のまま食べられるのではないかと思われました。

また、今年度、生活介護全体で個別のブースを作る取組みを始めたので、次年度は個別ブースの部屋に移行できないかという意見が出ました。

(4) 平成29年4月～現在

取組み前の様子

1年を通して、落ち着いて過ごしており、安定して過ごす事が出来ています。

取組み

個別ブースへの移行を行いました。4月から移行する事を伝え、3月の時点で場所、プログラムの説明を行いました。

小集団で過ごせるようプログラムを提供しています。昼食をお弁当箱のまま提供しています。

結果

「4月からは、このお部屋です。」と伝えることでスムーズに移行する事ができました。プログラムへの参加もスムーズに行え、午前は個別課題を行い、午後は日替わりのプログラム（クラフト・園芸・DVD・体育館利用）を行っています。

朝礼・終礼時には、日直をしてもらい、その日の予定の発表を行っています。部屋の掃除も行うようになり、ロッカーに自身が持ってきた雑誌を直す等、自身の居場所を確保している様子です。

昼食はお弁当箱のまま食べる事ができており、食事量も増え、偏食も少なくなってきました。

考察・次期取組みについて

使っていた机や椅子は、本人と一緒に運び、部屋は変わるが個別のブースは変わらないように配慮を行う事で落ち着いたのではないかと考えられます。

また、本人が前年度、他の利用者の様子をよく観察していたので全体の動きをよく理解されていたのではないかと考えられます。

小集団で生活するようになり、他の利用者と関わる時間が増え、自身の感情をうまく表現できずトラブルになってしまう事もあります。それを解消するためには、スムーズな対人関係の構築が必要になってくるのではないかと考えられます。

29年10月の時点では、個別テーブルでは無く、二人一組の作業テーブル（図1）を使っており、スケジュール（図2、図3）も全体の掲示のみで行っています。



(図1)作業テーブル



(図2)タイムスケジュール



(図3)週間スケジュール

4 取組みにあたり配慮したこと

(1) わかりやすさ

自閉症の方は視覚情報が理解しやすいため、タイムスケジュールや伝えたい事は表示したり、図にしたりする等なるべく視覚的支援を心がけました。

複雑化はせず「場所・時間・誰と・何をするのか」を基準にわかりやすい形で伝える事を心掛けました。

(2) 職員間の意思の統一

PDCA サイクルを基本に、継続的に支援方法を見直していき、本人への働きかけは何度も話し合い、全職員が共通の支援ができるように気を付けました。

日々の様子を見て、本人が出すサインに気づくこと、耳を傾ける事に重点を置いて取組みを行いました。

5 まとめ

「自閉症の方への居場所づくり」をテーマとしてチームで取組みを開始し、話し合いながら、実践する事でどうすればご本人が安心して生活できるのか、そのためにはどんな支援が必要なのかを皆が考えるようになりました。少しずつ落ち着いていく利用者を見て、達成感が持つ職員モチベーションも上げる事ができました。

対象の利用者の日中活動も安定し、職員のスキルアップにもつなげる事ができました。そして、行動を起こさなければ、よりよい支援につながらない事も再認識する事ができました。今後の課題についても、専門性を持ちチーム支援を継続する事で、ご利用者がより良い生活ができるよう支援を行っていきたいです。

ご本人主体の支援の方法、チーム間での連携の大切さを改めて認識できる実践となりました。

